

水引

伊予水引は結いの心

妻鳥 和教

愛媛産には、愛がある。



結納セット

伊予紙発祥の地、伊予三島川之江製紙工業地帯の中にあつて、今も手作りの極みを温存している和紙製品に水引がある。

伊予和紙、中でも改良半紙が市場の六〇%近くを占めるようになったのは明治の三十五年頃。その勢いが今に続くものに水引がある。

伊予和紙の歴史は、宝暦(二五〇年ほど前)の頃、土佐から密かに中之川峠越えで伝わってきた事による。それから百有余年、無名の産地であつたが徐々に業を磨いてきた。吉田松陰推薦の巻紙は、川之江の製品。幕末の民謡に、村松元結、妻鳥浜雨合羽とあつ

て、早くも当地の海岸沿いで紙加工品が誕生していた。

紅白の水引生産の始まりは元結といわれ、これは水引二大産地の長野県飯田市も同じである。明治維新後鬘を結うことがほとんど無くなり、両産地とも活路を紅白の水引に求めた。

その紅白の水引の起源であるが、聖徳太子の時代、遣隋使が持ち帰った贈答品に、赤色の麻紐で結んであつた事に由来するという。赤は太陽、夏、南、そして魔よけの色と、中国周朝時代から尊ばれていた。これを紅と我が国で呼んだ。

それが紅白になった理由の

それが水引の名の起こりとする説がある。

この水引が麻紐から紙紐に変わったのは関西が古く平安時代とされ、関東では室町時代といわれている。

水引といえは、水引草が思い浮かぶ。あの長い花軸に小さい赤い花が行儀良く並んでいる様をみて、かれんとも和んでくるとも人はいふ。花言葉は祝い事、心遣いである。

これが武士などの社会に迎えられる。それを文献から探ってみると、一六〇三年発行の日葡辞書に、「進物に用いる染めた紙紐」と解説が見える。

水引生産が盛んになった理由として、宇摩東部の八綱浦の松原は、糊を乾かし、色を付けては乾かす作業場に適していた。それと伊予和紙の販売網があつたことも幸いした。

さらに特技の持ち主、例えば和紙を包丁一本で寸分の誤差もなく裁断をする人には関係者一同「さん」付けである。紙漉きさんと同じである。

和紙の産地の有利性もある。



金封

一つに、日本人は往古より白を尊んでいた。これは朝鮮も同じ。中国の紅と白を結び合わせる事によって、さらに贈り物の価値は高まり、相手への心遣いが表れると考えたらしいという。

この作法は貴族社会に受け入れられ、広く利用された。麻を編んで紐状にしてのばすにも水、それに糊を付け、紅白の色付けにも水がある。



水引作りの作業風景(色付)昭和50年頃



伊予三島市立南中学校
一柳美穂・星野祐美・森実千恵・藤井麻貴作
題 竜の頭
県作品展工芸部門で特選
指導者 加藤勇教諭

が残っている。井原さんの作品は川之江紙のまち資料館に保存展示され、他の人の作品と共に参観者を驚かせている。さらに中学生にも伝わった。伊予三島市立南中学校生徒徒作「竜の頭」も設計、分解、制作、組み立ての手順で作られた。大好きな祭り太鼓台の掛布団の竜の頭を作りたいという希望を叶えたのは加藤勇教諭である。完成までの苦労が大きかっただけにその喜びもひとしおであったという。この経験が将来の名工の誕生につながればと願う。

ところで結納の風習であるが、藤本義一氏が「飾り付けられた結納を眺めていると、花嫁の父はこれほど複雑な心情になるものかと思ったりする。」と述べている。父娘のつながりをこの時ほど強く感じるのではないのか。古いとか無駄とかでなく、父親の気持ちの整理にも、結納の儀は尊重

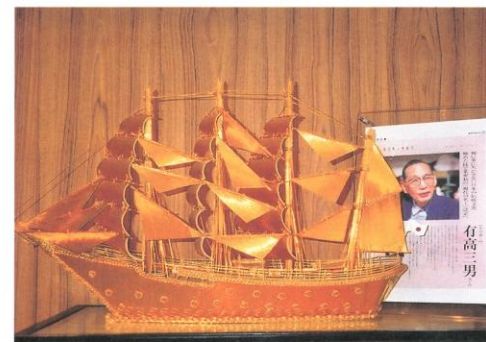
すべきではないかと訴えたい。それと夫婦生活何十年を記念して、結納の品を神社などで焼く、祝い焼きの儀が浮上しつつあると聞く。これは円満夫婦増加に繋がる。人生の吉凶につけても、それぞれ慶び、悲しみを分かち合う事によって、人と人のつながりが深まる。その心遣いを形に表したのが、金封である。贈り物に華を添え、縁を大切にし、神仏に対する心遣い



愛媛県紙産業研究センターにて。

を表す。その伝統の意味を理解して使って欲しいと、ひそかに願いながら金封が作られている。

めんどり、かずのり 一九三〇年伊予三島市生まれ。愛媛師範・玉川大学卒業。小中学校長を経て、図書館長、公民館長を歴任。著書として、「予士の峠物語」「四国山村風土記」(紙の町を拓いた人住治平翁)続など。地場産業に関するもの、現在集大成として「予士の峠をゆく」執筆中。



有高三男さん(故人)の作品



井原時三郎さん(故人)の作品

今も、金封に使う奉書紙の改良が行われている。毛筆用と印刷用(色刷り)とを作って欲しい、さらに両方とも可能な和紙の風合いのある紙を漉いて欲しいと無理を承知で注文が来る。それが全国の金封生産地へ送られている。先の大戦後、景気が良くなると、水引も紅白だけでなく金銀も含め多色のフィルム巻きの水引が機械で作られるようになった。

金封は広辞苑など辞書には無いことばである。その起りは村松の業者が、金を包む封筒、それを短くして金封にしたという。この金封の広がりには、戦争に赴く兵士の無事を祈った贈り物に、あるいは戦死の家族に悲しみの心を表した金品をそれぞれの包みに入れて渡した。これが評判になったという。

結び目は、普通吉事には結び留め、婚礼と凶事には結び切りであったが、さらに新しくあわび(あわじ)結びが発案され、その豪華さが競われ、今日の隆盛をみた。吉凶禍福に心を伝えるに、金封は格好の品となった。それは日本人の美意識、形と心を尊重する民族性に支えられたからである。次は水引を利用して結納セットの作成である。結納の言葉は、室町時代に「ゆいれ」を結納の文字に当てたとされている。

結納の品物は所によって異なる。それぞれに似合う作品を技術者が作成。それを部品に分けて、分業して作り、最後に組み立てる作業工程を生み出した。これで終わらないのが、当地の風土。縁起物から美術工芸品へと発展。名工と惜しまれた、井原時三郎さんの「勇躍、馬」や有高三男さんの「宝船、帆船」など幾多の作品